



2015年(平成27年)

3月号(No. 838)

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

ムスターグアタ登頂へ

2014年海外登山助成登山報告	1
法政大学体育会山岳部アマダブラム登山隊2014	4
テンギ・ラギ・タウ峰登山隊2014報告	4
YOUTH CLUB冬山・雪崩対策講習会に参加して	5
黒部横断2014年12月19日~29日、全11日間	7
追悼 高木泰夫氏を偲ぶ	9
INFORMATION 創立110周年記念事業	10
東西南北	11
活動報告	14
資料映像委員会/集会委員会	
支部だより	15
北海道支部/東京多摩支部	
図書紹介	16
図書受入報告	18
会務報告	19
新入会員	21
ルーム日誌	21
会員異動	21
INFORMATION	22
編集後記	23

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10~20時
水・金……………13~20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10~18時

ムスターグアタ登頂へ
2014年海外登山助成登山報告

2014年、東京農薬大学山岳会が、同大山岳部創部90周年の節目の年に新疆ウイグル自治区のムスターグアタ峰(7546m)への遠征を行ない、全員登頂を達成した。

東京農大山岳部 村田 岳

さつきまで左手に見えていたカラクリ湖もコングールの山々も雪のスカイラインに隠れ、目の前は雪の斜面、群青色の空だけになっていよいよ頂上近しを感じていた。まだなのか? まだ続くのか?

不意に傾斜が緩くなり平らになった。足を止め、顔を起こしてみると雪原の奥にちよこんと岩の台座が見える。滑稽なまでに分かりやすい頂上だった。8月31日現地時間14時30分、3年生の小野寺が

トップで登頂した。続いて登攀隊長の高野、淀川、そして2年生の大山、やや置いて西出、3年生岩附、16時に女子隊員渡邊と私が登頂。ここに第1の目標であったムスターグアタへの隊員全員登頂を達成できたのだ。

なぜムスターグアタだったのか?

2014年、農大山岳部は創部90周年を迎えた。この90周年に海外登山を企画してはどうか? そ

んな話が出たのは2年以上前であった。早速に準備委員会が立ち上がった。ところが周りを見回してみると、中心となつてもらうべきメンバーたちは、2000年度の冬山遭難によつて部員ゼロとなった

山岳部の立て直しに力を注ぎ、あつという間に10年近くがたつてしまった結果、齢も重ね、仕事、家庭、また社会的地位など長期登山に参加できる環境ではなくなっていた。新たに生まれた若手のOBにしても、山岳部を4年間全うしているとはいえず、以前のような活動内容の中で採まれたわけではない。体力的には申し分ないが総合力としてはまだまだ足りない。しかも高所の経験者はほとんどおらず、現実には記念事業として大々的に登山を展開するには到底力が及

ばない。こんな状況で90周年記念登山などできるのか?

視点を変えてみれば、山岳部はコーチたちの献身的な努力のお陰で事故前の活動にようやく近づいていたし、そして何よりも若手OBと学生が大きく途切れずに繋がってきている。大上段に構えずに考えれば、今こそ海外登山へ目を向けるチャンスではなからうか。コーチたちに後押しされて、改めて現有の力で何ができるかを高所経験者、コーチ、学生で話し合う場を設けた。そこで2014年創部90周年、16年農大創学125周年とイベントが続くことから、5から6年後に大きな目標を置く長期計画として、第1弾の今回は、若手の高所経験者を多く作り出すこと、海外高所登山のノウハウを継

承することを目的とした。参加者は若手OBと学生となる。まずはなるべく高い高度を経験できること。ルートが技術的にあまり高くないこと。荷上げ、ルート工作などすべてを自分たちで行なうこと。そして、学生参加を考慮して、夏季休暇を最大限利用できることなどを条件に山を選定した結果、新疆ウイグル自治区のムスターグアタに決定したのであった。

8月1日 先発としてOB隊員の西出と淀川が羽田を発った。これは昨今頻繁に起きていたウイグル暴動に対して、なるべく街中に滞在することを避けた方がよいといった情報を得たことによる。学生も3名いるので、極力都市部での滞在を減らすためだ。OBの吉田裕一が自身の中国自転車横断旅行を、我々の日程に合わせて手伝ってくれた。海外登山や中国旅行経験豊富な彼のお陰で非常にスムーズに準備を終えることができた。彼は、ウイグル暴動の煽りをもろに受けて、結局予定のルートを変更しつつ、無事に横断して12月に帰国している。

8月4日 本隊6名出発。
8月5日 カシユガルへ向かう

飛行機の手荷物検査はとにかく厳しい。靴は脱がされ、手荷物も執拗にX線検査機に通された。特にウイグル人乗客には、嫌がらせかと思えるくらいだ。暴動に対する警戒の厳しさを最初に感じた場面だった。昼過ぎにカシユガルのホテルにて先発の2名と合流。現地ガイドと少し手違いがあり、翌日の出発となったが、現地準備もすでに終了している。

8月6日 スバシへ向けて出発した。途中、公安のチェックポイントで一人一人パスポートの検査を受けた。コンゲール山群を回り込むと中巴公路は快適な道となりムスターグアタに続いていった。カ



山頂にて(左から)岩附、西出、小野寺、大山

ラクリ湖を過ぎて、またも公安でのチェックに小一時間費やし、やっとスバシに到着。ところが今度は荷のチェックだと再び先ほどの公安へ行く羽目になった。今年のスバシは川に水が流れておらず、ここより上部の遊牧民が集落を作っている場所で順応を図る予定であった。順応を兼ねて徒歩での移動を考えていたが、結局例の公安に2時間も足止めされ、時間が遅くなってしまったので車での移動となってしまった。後々分かるのだが、実はBCまで車で行ける。ただこの集落は、4100m(ガイドの話では3900mとの情報)あり、初日は皆頭痛に悩まされることになる。

空港での手荷物チェック、街中の武装警察のパトロール、公安のチェックはやはりウイグル暴動を警戒してのことであろうが、スバシ手前の公安のチェックはやたらとイチャモンをつけられた、とはガイドの言である。彼が言うには、私たちが日本人だからだということだ。日中関係の悪化はこんなところで影響を受けるのか？

8月9日 BC(4420m)入り。

2日の順化行動を集落で行ない、徒歩でBCに移動。学生の岩附、女子の渡邊がやや調子を崩していたが、BC入りは順調だった。隊荷はすでにラクダによって運ばれていた。

8月11日～13日 C1荷上げ。

隊員の調子も良いので、予定を早めてC1(5430m)へ荷上げを開始。C1までは石と礫の道であった。しっかりと踏み跡があるのは、ポーターがロバにて荷上げ、荷下げをしているためだ。私たちはすべてを自分たちですることに拘ったが、先に入山していたドイツ隊はロバを利用していった。ヨーロッパからの隊は積極的に利用しているようである。ポーターが言ってきた料金は20元/kgだった。

C1への荷上げは思った以上にすんなりだった。これは、出発前に常圧低酸素室でトレーニングした効果だったように思う。出発の2週間前から各自時間を作り、農大の研究室にあった低酸素室を使い4600～5300m相当の低酸素の中でエアロバイクを漕いだ。富士登山を数度義務づけてはいたが、このトレーニングで各自の低酸素における反応が分かっていた

のは大きい。

8月15日～17日 C2荷上げ。

C1へは一面濃霧、風と雪が舞う中の移動だった。しかし、C1への荷上げ行動で、学生隊員も体は慣れてきており、悪天にも余裕がある。C1での宿泊は、やはり頭痛を感じた者が出たが、16日が停滞となり、かえってこれが体を慣らすことになった。

8月17日 C2(6010m)荷上げ。

C1の上に見えるセラックに向かって雪面を上り、セラックの下を左に大きく巻いていく。1ヶ所跨ぐのがやつとのクレバスにロープを張った。セラックを回り込み、クレバス帯に入って、急雪壁、小クレバス、そしてその上の大きなクレバスを回り込む所にロープを張る。複雑なルートを進み、いったん下って大きな雪面の登りとなった。一段上がり、雪原の右の斜面を登って上の段に出ようとしたが、深いラッセルに思うように進まず、時間切れ。斜面を切り崩してC2とした。下山では吹雪となつてホワイトアウト寸前、風が爆音を上げて吹きすさんだ。さすがに2年生はビビっていたが、風は

局所的である。冬富士や日本の冬山を経験した隊員たち、学生もOG渡邊も強風の中、淡々と下つていく姿は頼もしい限りだ。

8月20日～22日 AC荷上げ。

前回の荷上げとは打って変わり、快晴の中での荷上げは嘘のように順調にC2へ。ここでの宿泊で3年の小野寺とOG渡邊に高山病の症状が出てしまった。22日、この2人と私はBCへ下り、ほかの5名でACへの荷上げをした。この日は朝から冷え込み、荷上げメンバーは快晴の中であるが、手足の感覚がなくなるほど寒かったという。7時間かけ6650m地点に至り、ここに荷をデポしてBCに下山した。アタックの態勢は整った。

8月27日～9月1日 アタック。

荷上げを終えBC休養に入ると、天気は悪天周期に入っていた。ヤマテンの猪熊さんからの予報を基に、27日BCを出発、晴天の中でのC1、C2入りだった。いよいよACへ。小野寺、渡邊、私にとつては、初めての高度となる。ルートは広い雪面、起伏があり体力を奪われる。6650mのデポ地に着くが、一段上がり昨年の中国

隊のテントが放置されている場所にAC(6680m)を設営した。C2より7～8時間、大半が頭痛に悩まされ、食事もあり進まない。はたしてアタックは成るのか？

不安ばかりが募る。30日強風で停滞。31日いよいよ頂上アタック。

朝日はムスターグアタの山体の向こうから昇る。陽が射したのは8時過ぎ、それまでの寒さは手足の感覚がなくなるほどだった。起伏のない、延々と続く雪の斜面。1時間で標高差1000mを登るのがやつと。登れども現れる雪の斜面。空に向かって果てしなく登っているようだった。8～10時間の登りで、やつと雪原の先の岩の台座、晴天の頂上に立つことができた。

下山勧告

西稜からの全員登頂の後、OBの高野、西出、淀川の3名での北峰→本峰への縦走を計画していた。9月4日、偵察と荷上げも終え準備も整ったところで、8日までに下山せよとの下山勧告を受けた。ウイグル暴動の犯人が同山域に逃げ込んで、一斉捜索を行なうためであった。学生やOGもいる隊であり、何よりも安全を第一に考えるべきと判断、非常に残念だが下

山を決断し、6日、BC撤収、11日帰国となった。

最後に

学生(3年生、2年生)を連れての7500m超の登山は、新たなチャレンジだった。この山の怖さは大きさと傾斜にある。水平距離に対して高さを稼げないこと、つまりは何かのときには簡単に標高を下げられないところだ。脱落者も予想したが、学生も含めて皆しつかりと自己管理をし、頑張ってくれたことで全員登頂を達成できた。だが、本来は当事者がすべてを行なうべきところを、未熟な部分も多々あり、多くの経験者の力をお借りしなければならなかった。また、計画が先行し、メンバーの大半が計画に乗っただけの感があつたことから、主体性に少々問題が残ってしまった。とはいえ、多くの経験を蓄積できたことは大きな成果であつたろう。2016年の第2弾への参加を今回のメンバーから4名が表明してくれている。「次に繋がる礎となる登山」はできたと思う。彼らが今度は主体性を持って計画し、よりレベルの高い登山を展開してくれと信じている。

法政大学体育会山岳部アマダブラム登山隊2014

法政大学体育会山岳部主将 前田優樹

山岳部に入部して1年目の春、私は初めてヒマラヤを訪れた。初めてのヒマラヤには見たこともない壮大な景色と感動があった。しかし、そのときは山頂を踏むことは叶わなかった。

4年生となり、卒業を前にしてもう一度ヒマラヤで、自分にとって挑戦的な登山を考えると、今回の遠征を計画した。高所経験豊富な松本OB、橋本OB、後輩の石井に声をかけ、名峰アマダブラムを目指すことに。エベレスト街道において、アマダブラムは必ず人々の目を惹く美しい山だ。

BCに着くとまるでテント街である。計画では、キャンプ1で1泊して高所順応を行なう予定が、荷上げで重荷を持ち過ぎて皆消耗してしまい、一度BCでレスト後、ワンプッシュで上がることに。

キャンプ2からのルートは急な雪壁が続く。石井の消耗が激しく、隊の間隔が開いてしまっていた。

6400mを超えると高度障害により先行する前田もペースが落

ちだす。6400m地点で待つのも後続の姿が見えないため、先に山頂を目指すことに。6700m地点の無線交信で松本OBから、石井、松本、橋本の3名は6500mで引き返す旨を伝えられる。頂上を踏んでから下りますと返事をし、山頂を目指す。

頂上直下200mは緩傾斜の雪壁が続く。なんとか山頂にたどり着き写真を撮って下降。高度障害のため呼吸が上手くできず、下降に多くの時間を費やした。

翌朝も体調が悪化し、肺水腫の疑いがあつたため、HC付近からヘリで病院に搬送されることになった。

(遠征期間…2014年10月5日～11月3日、登頂…10月22日14時50分)

今回の遠征では、日本山岳会の海外登山助成金をはじめ、山岳部や大学にも多くの支援をいただきました。隊員を代表して厚く御礼を申し上げます。

テンギ・ラギ・タウ峰登山隊2014報告

鈴木啓紀

2014年10月29日、テシラプチャを越え、ロールワリン氷河に降り立ち、初めて目指すテンギ・ラギ・タウの西壁を望むことができた。

イメージどおりのサイズと岩質、イメージよりもはるかに貧弱な氷のライン。そして何より、イメージをはるかに上回るリッジ上の雪ネパール入国直前のサイクロンによる影響は明らかで、この壁を仔細に観察し、「状態が悪い、登らない」「いや、行くだけ行ってみよう」の間で判断は揺れた。

今思い出しても心底苦しい辛い経験ではあるが、私の体調不良により、行程ははかどらず、テシラプチャで話し合いを持ち、体調に不安要素を抱えたまま壁に取り付くことのリスクを勘案し、今回の登山を取りやめることを決断した。

メンバー…花谷泰広、鈴木啓紀
遠征期間…2014年10月15日～11月17日



テンギラギタウ西壁を望む

ひと晩、壁の下にテントを張って話し合った結果として、僕たちは「行く」という判断を下し、ベースキャンプへと返す足でパルチャモに登り(1ピッチ、ロープを伸ばし、ほかのパーティが行かないリアルサミットまで)順応を済ませ、アタックに備えた。

11月7日、長駆テシラプチャを越えて壁に取り付くべく、テンポにおいて快適なベースキャンプを出発。

※巻頭記事のムスターグアタ、本ページのアマダブラム、テンギ・ラギ・タウ西壁は、海外登山助成金を受けた登山です。

Training

YOUTH CLUB

冬山・雪崩対策講習会に参加して

堀 香織

YOUTH CLUBの第2回 全国安全登山実技指導講習会 冬山・雪崩対策講習会に参加してきました。2015年1月17〜18日に立山の国立登山研修所で行なわれ、東京・埼玉・東海・関西・京大・山岳部・広島・四国の各支部から21人が受講しました。受講者は、私のような雪山初心者から、ヒマラヤ経験のある方まで様々で、年齢層も10代から50代までと幅広く、有意義な交流をしながらの受講となりました。

1日目は、まず開会式にて、スタッフの方々の挨拶、講師の国際山岳ガイド北村俊之氏の紹介・挨拶、受講者の自己紹介を行ないました。その後体育館へ移動し、怪我人搬送のためのツェルト梱包搬送を学び、実際に班ごとに実践し、ツェルトに作る支点の位置や、搬送用のスリング・ロープの結び方などを習得しました。

その後は研修所の裏山で、実際の深い積雪の中での実習となりま

した。まず、積雪の安定性テストについてです。積雪層に極端に温度差があると弱層の可能性があるため、専用の温度計での積雪温度測定方法、指先での積雪の固さの確認方法、雪質の確認のためのルーペでの雪の結晶の観察方法を教わりました。弱層テストでは、実際にスノーソーで積雪の四角柱を作成し、手のひらや腕、最終的にはスコップで衝撃を与え、積雪層の崩れやすさを確認しました。こ



ビーコンサーチとプロービングで埋没地点を特定させる

れらのテストをすれば、積雪の情報を知ることが出来ます。まずこれらの情報を手に入れた上で、ほかの見聞きした情報と複合させ、雪崩の発生リスクを総合的に判断しなければなりません。これらのテスト方法の技術の習得とともに、総合的な判断力を身に付けていかなければならないと実感しました。次は、5〜6人のグループごとに、雪崩搜索の演習を行ないました。ひとつのグループが積雪中に隠したビーコンの入ったザックとダミー人形を、別のグループが搜索して救出するという実践演習です。流れは、まずリーダーのビーコンでグループ全員のビーコンの作動を確認したのち、発生時間の記録、警察への連絡などを行ない、ビーコンで埋没者の搜索を行なう人、プロープで埋没者を確認する人、二次雪崩の警戒のための見張り、など役割分担を決定します。搜索開始の合図とともに走り出し、ビーコンで大体の場所を突き止めた後、縦横の距離が最短となる場所をピンポイントとし、プロービングで埋没者の確認に入ります。プロープで埋没者が確認できヒット

となれば、スコップで雪を掘り、埋没者の救出を開始します。積雪中から無事救出できたらデブリの外へ移動させ、1人は救助者に付き添い、ほかの人は残りの埋没者の救出にあたります。

実際に実践形式で行ない、まさに、見て聞いているだけと実際に行なってみるとでは大違い、という感想でした。私はビーコンもプロープもほとんど使用したことがなかったため、雪山初心者としての感想ですが、まずビーコンでピンポイントを探すにも深さも距離として出てくるため時間がかかり、プロープの組み立ても一瞬ではできず、プロービングの際にも感触がよく分からずかなり力を入れ埋没者を見つけまいしました。

そして、生存率が下がるという15分以内に救助しなければと焦り、周りを警戒する余裕もなく、見張り役がいなくて二次雪崩が起きれば確実に巻き込まれている、という状況でした。実践演習を、隠す側、探す側、と交互に繰り返すうちにだんだんと流れが掴めてきましたが、埋没者がザックやダミー人形でなく実際に受講生が雪に埋まっていた際には、やはり皆早く

救助しなければという焦りと、一方で傷つけてはいけないと慎重になり、救助に時間を要してしまいました。しかし、実際には、膝下が雪に埋まっているだけでもスコップで掘らなければ引く張ることはできず、ただ雪を掘っただけでは重くて引き上げることができないため、埋没者の周囲の雪も徹底して除去しなければならぬ、救助した後のファーストエイドも非常に重要、ということを感じたところで、1日目の講習は終了となりました。

1日目の夕食後には、皆が待ち望んでいたであろう交流会が行なわれました。各々地元の名産や酒を持ち寄り、山談義に花を咲かせました。今まで会に属さず個人で山に登ってきた私にとって、このように全国から集まった方々と交流ができたことは非常に新鮮で、貴重な時間でした。海外の山の話、地元の話、日ごろのトレーニングの話、支部のすごい人の話……等々どれも興味深く、皆のバイタリティーに感銘を受けました。私もこれから様々な山行スタイルに挑戦し、自分の登山の幅を広げていきたい、そのためには体力を

つけないければ……と思った夜でした。

2日目の朝は6時から北村講師による雪崩回避机上講習が行なわれました。北村講師が体験した雪崩の体験談の数々は、雪崩の怖さを、現実味を持って教えてくれました。危ないと思ったら躊躇する、現実味を持って教えてくれました。危ないと思ったら躊躇する、現実味を持って教えてくれました。危ないと思ったら躊躇する、現実味を持って教えてくれました。

その後、再び裏山で、雪崩搜索の演習を行ないました。1日目よりレベルアップし、遺留品がいくつか残されていた場合どこから探すか、埋没者の人数が分からない



雪が降りしきる中も、講習は続いた

場合はどうするか、ビーコンが縦に埋まっている場合はどのような電波受信状況になるか、など様々なパターンで実践しました。慣れなくて前日よりスムーズに動けるようになりましたが、リーダーは常に全体を見て指示を的確に出す、夢中で雪を掘っていても周囲の声に耳を傾けるなど、次々と出てくる課題は尽きませんでした。

また、ビーコン無装着者の搜索のために、ラインプロービングも学び実際に行ないましたが、1m進むのにかかるの時間がかかり、ラインプロービングでの搜索の難しさを知りました。

最後は、希望者の雪崩埋没体験です。北村講師が1・5mほどの雪穴を掘り、頭部周囲にはエアポケットを作成し、体験者の上に50cmほどの雪をかぶせ、危険がないよう行ないました。体験者は、地上の声はかすかに聞こえるが、体は全く動かせず、真っ暗で不安だった、とのことでした。

研修所に戻り、班ごとに反省会を行ない、最後に1人ずつ感想を述べ、閉会式を行ない、山での再会を誓い解散となりました。ビーコンやプローブなどの道具

は、持っているだけでは使いこなせません。一度講習を受けただけでも、その後実際に使わなければ（もちろん講習以外で使わないことを願っていますが）時間とともに記憶は薄れます。講習に参加したり、地元の支部で開催するなどして、定期的に実践演習を行なうことが非常に大切だと実感しました。また、自分だけでなく、山に登る仲間を巻き込んで、皆でレベルアップしていく必要があります。

私の所属する広島支部でも、先日、本講習会の復命講習として雪崩講習会を行ないました。雪山に登る者の常識として、雪崩回避や遭遇した際の対処技術の習得が浸透していけばよいと思っています。最後になりましたが、このよう



Climbing Report

黒部横断2014年12月19日～29日、
全11日間

中島健郎

メンバー…上田幸雄、澤田実、成田賢二、中島健郎

と年越しを迎えるのかと思うと、嬉しいようで寂しい自分。そんな11日間の黒部横断であった。

①大町～扇沢～新越尾根取付

②～岩小屋沢岳～北西尾根2120m

③～北西尾根1350m

④～黒部川～十字峡～黒部別山北尾根1050m

⑤～黒部別山北尾根1610m

⑥～壁尾根J.P～別山谷コル手前

⑦～黒部別山北峰～黒部別山西面1750m

⑧～八ッ峰Ⅲ稜・P4

⑨～八ッ峰・I峰～Ⅲ・Ⅳ峰のコル手前

⑩～池ノ谷乗越～本峰～早月小屋

⑪～馬場島～伊折

2014年12月29日、富山市内は雨が降っていた。年末で街は大忙し。人で賑わう温泉に肩まで浸かっていると、昨日まで八ッ峰で猛ラッセルしながら喘いでいたのが嘘のようだ。このままぬくぬく

黒部自体は今年で3シーズン連続であるが、八ッ峰を組み込んだ計画は昨年続き2回目。昨年は

黒部別山第一尾根を登り終えた後、ハシゴ谷乗越で3日間停滞している間にチャンスをつた。今年こそは八ッ峰から剣へ立ちたいというので、前半はなるたけ労力のかからないルート採りで黒部横断を行なうこととなった。

12月19日、昨日までの爆弾低気圧が嘘のように晴れ渡っている大町。今年こそは軽量化といいたが、ザックは結局40kg。冬も休みなく除雪を行なう扇沢駅の従業員を横目に、いきなり新雪のラッセルが始まる。初日の鈍った身体には非常に堪える。

2日目は新越尾根の取付からスタート。赤沢岳や鳴沢岳の東面には雪崩の破断面が見えているが、

尾根自体の危険性は少ない。昨日の日射で雪も締まり、4人のマンパワーで快適に高度を稼ぐ。予定では稜線手前までだったが、岩小屋沢岳を越えて北西尾根2120mまで駒を進めた。残念ながら剣は厚い雲で覆われ、明日からの悪天を知らせている。

3日目、昨夜からの積雪は30cmほどだが、下りも空荷ラッセルを強いられる。あわよくば十字峡までと思ったが、「下降でハマって暗闇を手探りで懸垂」だけは避けなかった。今日は安全牌を取り1350mの平坦地で幕営。下降点の偵察だけ行なう。

4日目、昨夜の偵察のおかげで1150mの懸垂ポイントまではロープなしでスムーズに下降。懸垂ポイントからは川床が望め、目論見どおり対岸からのデブリで横幅10mほどのスノーブリッジができていた。スノーブリッジ目がけて下降するも、出だしから空中懸垂。いよいよ登り返しは考えたくない所まで入って来てしまった。

30m4回、60m1回の懸垂で黒部川へ降り立つ。深々と降り積もる雪。轟々と止めどなく流れる沢の水。十字峡といえば紅葉シーズ

ンの写真で見たことがあったが、想像していた明るいイメージとは随分異なり、モノトーンの世界だった。

5日目、黒部別山北尾根上は昨夜からの降雪で相変わらずのハードブッシュラッセル。所々ロープを出す箇所もあり、高度はなかなか稼げない。壁尾根とのジャンクシンピークにも届かず幕営。

6日目、藪が減ってきたので、先頭装備はノコギリからショベルに変更。ショベルの掘削力と雪面への支持力は素晴らしいものの、思うようにスピードは上がらない。

7日目、今朝はホワイトクリスマス。テント内に干している、汗と垢にまみれた靴下にはさすがにサンタさんも見向きもしなかったようだ。別山谷のコルへ1ピッチ懸垂して北峰への急斜面をラッセル。雪崩れそうな斜面にロープを出しながら進む。北峰を越え西に延びる尾根を1750mまで下降。いよいよ八ッ峰が目の前に迫る。ラジオでは明後日から2日間の移動高とその後1週間の年越し寒波を報じている。ここまで休みなく毎日行動しているので、食料と燃料は嫌なほど残っている。ここで

引き返す理由はないが、ハツ峰上でハマるのも御免だ。2日の好天が勝負だが、連日の降雪で雪の状態が心配である。

8日目、昨夜からの積雪は大したことではない。いよいよハツ峰へ取り付く。夜明け前の剣沢横断はなんとも不気味でいい気持ちがない。Ⅲ稜下部は雪の状態も良く、スベリ台ルンゼも問題なく通過。P3のナイフリッジは完全に岩が出ており、アイゼンに履き替える。

9日目、いよいよ勝負の2日間と意気込んで出発するものの、外はまだ雪。いい加減オーバーヘッドラッセルに飽きてきた。というか、皆疲労が溜まってきたのか、なか



I峰直下を登る上田、背後には登って来た後立稜線(後ろ)と黒部別山(手前)

なかスピードが上がらない。今朝出発したテントサイトはすぐ近くに見えるのに、I峰山頂ははるか遠い。昨日から軽量化のために予備食や行動食もガンガン食い減らしにかかったのが、今更ながら不安に思う。

久々に背中に感じる温もりとまぶしい照り返し。天候も回復し、気持ちも晴れてラッセルに精が出る。ようやくたどり着いたI峰からの剣岳とハツ峰は、今までの労働をチャラにしてくれるかのように、静寂で美しい。しばし見とれてしまいシャッターが止まらなかつたが、我々にそんな余裕はない。

I峰山頂からは忠実に稜上をたどろうと試みるも、ナイフリッジにはうつすら雪が積もっているだけで通行不可能。いったん長次郎側へ懸垂下降して基部をトラバース。Ⅱ峰も稜上は不安定な雪のミックスで、引き続き長次郎側基部をトラバース。いつの間にか日が傾き、陰に入った途端、急激に冷氣に襲われる。Ⅲ峰の頭からは土嚢袋で懸垂。すでにヘッドランプでの行動となっており、これ以上の夜間行動は翌日に響くため、Ⅲ・Ⅳのコル手前で幕営。



9日目。I峰の頭から眺める剣岳とハツ峰

10日目、後立山が赤く染まる中、出発。Ⅳ峰下りは土嚢懸垂1ピッチ、Ⅴ峰下りは残置懸垂2ピッチ、Ⅵ峰登りは岩が出てきてロープフイックス。

Ⅵ峰下りは土嚢懸垂1ピッチ、Ⅶ峰も同じく土嚢懸垂1ピッチと順調に駒を進めるもすでに時計は14時を指している。見上げるⅧ峰は岩が出ていて完全なクライミングとなる。ふと左に目をやると、池ノ谷乗越はすぐそこ。長次郎谷の雪の状態も良い。ここで忠実に頭まで稜通しに行くとすると、今夜中の剣越えは不可能。かといって、ハツ峰を登るためにここまで来たが、八峰ノ頭と巻いてしまつては完登とは言えない。

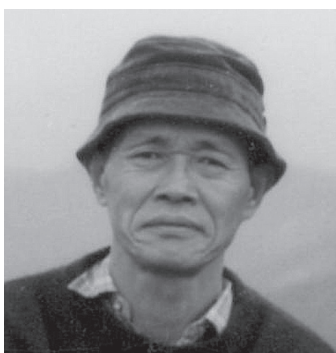
しばし議論の末、我々はエスケー

プを選択した。北方稜線でようやくワカンから久々のアイゼンに履き替える。剣岳山頂は16時30分。富山市の明りが輝き出し、ヘッドランプの中、早月尾根を下降する。途中からは日大山岳部のトレースに助けられ、19時30分には早月小屋に到着することができた。夜中には今までにないほどの暴風雪で、改めてここにいることの判断が間違いはなかつたことを感じながら、ぬくぬくとシユラフに潜り込む。

ただ単にヘタレな判断をしたと言えはそれまでだが、また課題が残つて次が楽しみな自分もいる。何が成功なのか分からないが、自分にとってどうなのかを強く感じさせてくれた山行であった。



9日目。夕闇が迫るⅡ峰のトラバース。後ろは剣岳山頂



高木 泰夫(たかぎ・やすお)会員No.5615

1930年1月 岐阜県本巣町(現在の瑞穂市)に生まれ、本巣高校、金沢大学を卒業。
1951年4月 県立加納高校生物担当教員になる。大学時代に登山を始めた関係で岐阜山岳会に入会。
1963年 当時大垣山岳協会創始者の1人であった故高木碯男名誉会員の勧誘で大垣山岳協会入会。
1963年9月 日本山岳会入会。
1968年6月～8月 大垣ヒンズークシュ・ヒマラヤ遠征隊にマネージャーとして参加。
1986年 県立土岐北高校長、1988年県立大垣東高校長に就任。
1987年奥美濃・ヤブ山登山のすすめ(ナカニシヤ出版)初版発行、他にも多数の著書がある。
2000年 定年退官。
2005年 日本山岳会創立100周年記念誌「新日本山岳誌」の編集委員長を務める。
2015年1月22日肺癌で病没。

1月22日、高木泰夫氏が逝去されたとの電話が入ってきた。かねてから体調が良くないと聞いていたが、改めて驚かされた。実は13年前の5月に同じ病院に私は直腸癌、高木氏は前立腺癌で入院、相前後して手術していた関係でもあった。あれから13年経過、氏は転移があり他界されたことは残念でならない。

岐阜県の高校教師として就職、すぐに岐阜山岳会に入会したが、略歴に記載してあるように高木名誉会員の強い要請で大垣山岳協会に入会、引き続き日本山岳会にも入会している。高木氏は元々岐阜県の有名な教育一家の出身であったが、夫人が高木碯男名誉会員の親戚であった関係上、碯男氏の媒酌で結婚され高木家に入られた。当時、大垣山岳協会では今西錦司先生を名誉顧問にお迎えしており、また先生は奥美濃に魅せられ、岐阜大学長として赴任されていた。

高木泰夫氏を偲ぶ

早田道治

追

OBITUARY

悼

その関係で今西先生との交流が始まり、高木氏の登山活動に大きな変化が表れている。このことは高木氏の著書のひとつである『奥美濃・ヤブ山登山のすすめ』の序文に記されている。今西先生とは奥美濃の山へよく出かけていたがすっかり崇拜し、高校の授業では脱線して、山の話と今西先生のことをよく話していたことは有名であった。

また今西先生との文通も多く、そのときの書簡や葉書が大切に保管されていて、これは日本山岳会岐阜支部が2012年に出版した『自然・登山・探究』(別冊)今西錦司書簡集に多く載せられている。普段は簡単に手紙をしたためる秀でた文才の高木氏でも、今西先生への手紙では幾度も幾度も書き直していたと高木夫人は話しておられた。

このように文才に長けた高木氏は、大垣山岳協会に加入してから「会誌月報「わっぱ」および年報「岳友」の編集に携わり、その才能を遺憾なく発揮している。この会誌の内容が評判となり、会誌欲しさに会員になる人がいたくらいであった。殊に05年に日本山岳会創

立100周年記念として出版された『新日本山岳誌』は1974頁に及び、編集委員長として全国の多数の著者の文章を一冊の統一された本に纏められた才覚は、素晴らしいと言いがたい。

1698年の大垣ヒンズークシュ・ヒマラヤ遠征隊に高木氏はマネージャーとして参加した。アフガニスタンの中部ヒンズークシュの未踏峰、ピークXほか2峰の初登頂に成功、アフガニスタン側と協議し、6026m峰をシャール・イ・アンジュマン(アンジュマンの王)、5585m峰は大垣市に因みコー・イ・オオガキ、5050m峰はコー・イ・スターラと命名した。このような大成功を収められたのは、実はアフガニスタンの情報が極めて少なかったなかで、高木氏の緻密な情報収集と計画の立案にほかならない。

奇遇な話をひとつ。退官時の大垣東高校の事務長は故高橋達夫氏(会員No.5221、前穂東壁冬季初登)であった。さぞかし2人で山談義が弾んだことであろう。

最後に高木氏の遺骨の一部を奥美濃の山に散骨して慰霊する予定である。

合掌

INFORMATION

創立110周年記念事業

海外トレッキングシリーズ

ブータン・ヒマラヤ・トレッキング



▲ガンカープンスム(7570m)の南東壁を仰ぎ見る。1940年代に世界から4隊が挑戦したが、すべて失敗に終わり、現在は世界最高の未踏峰となっている

未踏の世界最高峰を間近に！ガンカープンスム大展望トレッキング14日間

地球上に残された人類未踏の世界最高峰ガンカープンスム(7570m)。この山は、ブータン北部と中国の国境にある、ブータンの最高峰です。今回、記念事業として、圧倒的な迫力でガンカープンスム南東壁を望むことができる(写真)ベース・キャンプまでトレッキングします。

このコースに足を踏み入れた偵察隊やトレッカーはごく少なく、未踏の最高峰の懐深くに入り込む絶好の機会です。

期間 5月12日(火)～5月25日(月)

参加費用 69万8000円

発着地 東京、大阪、名古屋、福岡

最少催行人数 10人

問合せ 〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11 第7

東洋海事ビル4階 アルパ

インツアーサービス(株)

TEL 03-3503-1911

✉ info@alpine-tour.com

ネパール・ヒマラヤ1700km

の山道・グレート・ヒマラヤ・トレイル(ハイレイト・10コース)

ネパール政府が認定した、ウル

トラ・ロングトレイル、「グレート・ヒ

マラヤ・トレイル」の4つのステ

ジを、2015年秋から2017

年春にかけて10コースに分けてト

レッキングします。

8000m峰5座のBCや、世

界第3位の高峰カンチェンジュン

ガから訪問者も少ない西部辺境の

高地ドルポまで、グレート・ヒマラ

ヤ踏破の気分を十分に味わえる究

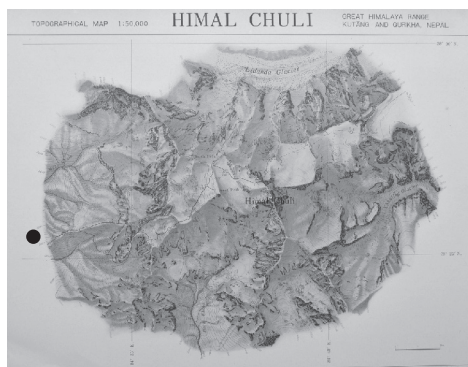
極のトレッキング企画です。コー

スの詳細は、『山』5月号で発表し

ます。問合せリアルパインツア

サービス(前出)

サービス(前出)



ヒマルチュリの地図。●印は写真撮影ポイントのカルカの位置



BC下のカルカから見上げたヒマルチュリ全景

航空写真と地図— 五百沢さんを想う

大森弘一郎

一昨年の暮れに五百沢さんが亡くなった。あのひょうひょうと拘らないユーモアある語り口を聞くことができなくなった。もつと話したかったのに残念である。

彼の追悼会が昨年6月に明治大

東西南北

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

ので、そのことについて書いておきたい。

昭和35年3月、慶應義塾大学ヒマルチュリ遠征隊が、ポカラで荷物の到着を待っていたとき。近くにインディアン・サーベイのテントがあるのに誰かが気づいた。そこに行けばこれから目指す山の様子がなにがしか分かるだろう、という期待でテントを訪ねた。見せてもらった3枚の航空写真を、山田二郎隊長は読めたようだったが、実体視の経験のない私には、理屈は知っていたがまるで見る事ができなかった。

その後、インディアン・サーベイのテントに日参することになる。このときこれが地図になるなどとはまったく考えていない。航空写真は見た、しかし読めない、写真を写すことは許されない。そこで手で写そうと思った。山に入ってから役に立たいとの思いであった。

そして、トレーシングペーパーと5日の鉛筆を持ってテントを訪ねた。そこで私のトレーシングペーパーを見た技官がマイラーのシートをくれた。この技官は航空写真の示す地点名を調べるために写

真を持ってきていたのだった。このときに貰ったマイラーは実にありがたく、これはもしかすると役立つかも知れないと思って日参した。

近くにはスイス隊のテントがあつて、キャプテン・ウィックが操縦するピラタスポーターが来ていた。日本から外貨の乏しい中をやつと来ている私たちにとっては想像もできなかった行動が、すぐそばで進んでいたが、実は私はその飛行機の写真を1枚も写していない。それほど筆写に没頭していたのである。ともかくマイラーを写真に重ねて突つた5日で写した。当時私は目が良く、おそらく精度は0・1mmより良かったと思うのだが、残念なことに現物が残っていない。黒白を反転した印画紙の密着を作った記憶があるのだが、それもまだ見つからない。

2枚目までは、満足のいく複写であつた。尾根、クレバスなどが線で表わされている状態で、現地に行つたときに役立てたい一心であつた。数日して荷物も整い出発の日が決まった。そのようなわけで最後の追い込みの3枚目は多少精度が落ちた。それでも3枚写し

た。これは山中ではまるで役に立たなかった。相変わらず自分は実体視ができず、ほかのテーマに追われてそれどころではなくなったから。

帰国してから、これを使って地図がでないかと思った。写真もずいぶん撮っていたから、できるかもしれないと思って、国土地理院を訪ねた。当時は、登った山の地図はもう不要ではないかという意見がある中で、飛び込みで会った方が、早速五百沢さんを紹介してくれた。そこから彼との縁が始まった。

彼はできると言った。ただ私が写した写真は枚数が多いだけで、すべてが登攀路という線上から上の方ばかり見ているのだ。実体視のために基線を作って写すという知恵が写すときにまだなく、またほかの方向の周囲もあまり写していない。隊員が皆そうだったが、頂上にはばかり気をとられていたわけだ。

そこでほかの方向からの写真を探すことになる。偵察のときの写真、JACの隊が写した写真や、聞き込んで数枚の写真をもらったと思う。もう一人重要な人は羽田野

誠一氏(故人)である。私の線画をA8という図化機にかけると、山の輪郭の線が宙に現れて、これに高度が入られるというのであった。これはちょうど3Dの漫画を見るとときに、線画が浮き上がって見える。これが図化機でやれたというわけだ。見ていると空中に線が浮かんでいる、その高さが分かるという。

困ったのは絶対高度が分からないこと。これは地図の精度でいうと邪道だと思ふのだが、相対的な高度で形ができればよいということにして、従来地図の頂上高度7864mと、BCの高度の4000mを基準として、あとは航空写真が水平に撮られていたという前提で進めることにした。このBCの高度にも問題はあった。

借りて持ってきた気圧高度計が当時は10cm角ぐらいの大きさであった。それをポカウで落として壊してしまったのだ。分解してみると軸の先の凸部の根元が折れていた。カメラマンの木村勝久さんが、自分の実家が時計屋であった経験から、軸を△に尖らせばよいとの提案をくれて、やすりで削って軸を復元した。だからその高度計で

ある測定の数値に全く自信が持てないのだった。

みんな頭が痛い。富士山に登ったときよりたしかに痛い。したがって、4000mはあるだろうということになり、それに高度計を合わせた。思えば無茶な話だが、登るためには理に適してもいい。次の高度計の調整は頂上でやろうと言っていた。多分それは合っていたのだろう。そんな怪しげなデータが基礎になっていて、次に正しい地図が出たらそれで検証しようと笑って話し合っていた。「地図というよりも作品だな」と話していて、あとから入る登山者からの情報で、「合ってたね」「正しかったね」と喜んでいて、そういうものであった。

羽田野誠一氏はA8で取り組んだ後、目が斜視になってしまったと笑っていた、それほど取り組まれたことをお礼とともに記録しておきたい。

次は地上写真のこと。私が写した1枚の地上写真を2枚焼き付けて、五百沢さんがその同じものを2枚左右の目で見ると立体に見えると言うのだ。そのような不思議な方法で五百沢さんが山を理解し、

羽田野氏が作った高度の入った線図の面の中に等高線と絵図や記号と影を入れる作業をした。

以下のことをもつとも強調したい。基線のある2枚の写真を見ると立体に見える。1枚の写真を見ても立体には見えない。しかしその1枚を2枚焼いて、実体視をするときのような作法でそれぞれを両目で見ると立体に見えると彼は言うのだ。

物を立体に見るということは、脳が両眼で見ることで立体に見るほかに、大きさの差、濃淡の違い、移動速度の差、大きさの記憶、知っている形の知識などで、立体の形を脳が理解するらしい。私の経験では、基線をどのように変えても知っている人の顔の立体感はいくらでもないということを知っている。それからの想像だが、その1枚から作った2枚だけでなく、別の位置からの情報が別々に頭に入っている、その山の地形。氷河のあるべき形、上から下に落ちてできる山の地形。

初めは信じられなかったのだが、多くの山岳地形を知り尽くしている五百沢さんの脳は、両目で2枚の写真を見るときという行動に反応し

て、すべての知識を動員して立体の像にして形を見せる。そういうことが行なわれていたのだと私は信じるようになった。最近2Dの写真をも3D画像にコンピュータで変換する技術が生まれているが、五百沢さんの頭脳はそれを先にとっていたのではない。

高度差の数字をつかんだのは羽田野さんとA8、山の地形の形状を見て図化したのは五百沢さんの知識と能力、そのように私は考えるのだ。この五百沢さんの能力が正しかったことは、何よりも地図がその後も正しかったことが証明している。

仙台の岳人・伊達篤郎さんとの資料館構想

八嶋寛

昨年の6月、故・伊達篤郎氏(伊達政宗直系)のご家族から「7回忌が過ぎて登山関係の遺品整理をしたいので相談したい」との連絡がありました。

96歳で亡くなる3日前、重篤な状態のときに見舞い、私は耳元で「家族が増えてよかったですね」(新たに加わった家族4人のこと)

と伝え、わずかに頷かれたのが別れでした。そのご家族からの連絡で数年ぶりに自宅に伺い、この春までに整理することとしました。伊達さんとは20年前に「山岳資料館」を作ろうとの構想を持ち、その「懇談会」事務局が私で、故・葛西森夫氏(東北大山の会OB)ら計8名の少人数で毎月のように集まっていた自由な話し合いました。

その中で企画したのが、1996年、仙台市博物館ギャラリーで開催した「仙台が誇る山の先達・二人展」です。二人とは横有恒氏(マナスル登山隊長、仙台市名誉市民)と山内東一郎氏(ピッケル製作者)です。私は準備のために各地を訪問し、皆様に大変お世話になりました。またJACの方々にも大勢見にきていただきました。



中央に伊達さん、向かって左に浅野知事、右に私(八嶋)

「懇談会」は2001年に「東北アウトドア情報センター」と組織を変えて活動を続け、伊達さんの「また蔵王に登りたいなあ」との意向から、みやぎ蔵王福祉登山なども開催しました。それは多少規模を変えて、今も「福祉登山」として月1回続いています。写真は1999年の秋、当時の宮城県知事と蔵王に登ったときの1枚です。

一方、資料館構想では、様々な努力をしていますが大変難しいことです。構想内容では伊達さんと私で多少違っていました。私は若いときからヒマラヤ登山をしており、登山隊長としてチベットの山方面に行ったときにヤク毛の黒テントや天山のパオ、それぞれの生活用品、馬具などを持ち帰り、報告展の後、当時の「歴史資料館(現・宮城県立東北歴史博物館)」に寄贈しました。この品々は展示する機会なく過ぎてきましたが、今年、具体的に「展示会開催が決定。東北歴史博物館を会場に、本年12月15日から来年3月21日まで」「ヒマラヤへの憧れ、東北人のヒマラヤ登山記録から防災アウトドアへ」のタイトルで開催の運びとなりました。これが伊達さんの遺品整理と重

なったことは、決して偶然ではないと思っています。この機会に伊達さんの顕彰も行なう予定で、構想から20年、一つの結実と思っています。さらに、みやぎ蔵王を拠点に山岳図書やライブラリーを収集していくと考えています。

初めてお会いしたのは伊達さんが75歳、私は36歳で、今、私はまだ65歳。年に関係なくできることに立ち向かう姿勢を学ばせていただきました。『遙連(ようれん)』八十路の記』は伊達さん80歳を区切りに出版した本で、編集のために数年間、ご自宅に通い詰めたのも、私にとって良い経験になりました。向後「山の本、資料がどんどん失われていく」現状を嘆き、伊達さんと始めた資料館構想を、さらに進めます。伊達さんと生前親しくしていたら、この構想を知っていたら、JACの方々に広くお知らせしたいと思いました。また、ご協力をお願いするかも知れませんが、その際はよろしく願います。連絡は八嶋(☎090-086161397)へ。または、東北アウトドア情報センターのHP記載のメールアドレスでも連絡可能です。

活動報告

資料映像委員会

第18回全国山岳博物館等 連絡会議開催される

さる平成26年11月22日（土）、集
会室で恒例の同会議が開催された。
各地で運営されている山に縁のあ
る博物館等が一所に集まり情報の
共有化を図ることを旨とする本会
議に、今年参加したのは市立大町
山岳博物館・富山県立山博物館・
松本市山と自然博物館・谷川岳山
岳資料館・東京都写真美術館・植
村記念財団植村冒險館・北区飛鳥
山博物館の7館である。

会議では、各館より昨年の会議
以降に実施されてきた山に係する
展覧会や講座その他のイベント
の様子や各館が抱える問題点や今
後の課題などが披露され、館同士
あるいは委員との間で活発な質疑
応答が交わされた。

竣工20年から数十年を迎える館



ルームでの記念撮影より

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

も多く、修復工事や内装のリニュー
アルなどの報告もあったが、今年
は特に2020年の東京五輪に向
けての対応や、3月に開業予定の
北陸新幹線などによる影響も話題
に上った。また昨年度末、東京都写
真美術館と北区飛鳥山博物館でそ
れぞれ開催された冠松次郎名誉会
員に関わる企画展の実績も報告さ
れ、盛会裡に閉会した。会議後に一
口坂の中華「佳月」で参加者同士懇

親を深めた

（中野守久）

集委員会

高峰高原スノートレック に参加して

集委員会による標記の山行に
参加した。一人暮らしの私はこの種
の山行には初参加であったが、目的
はボケ対策&仲間とともに雪山を
楽しむこと。参加者は、女性2名
を含め60〜70代の11名だった。

2月21日（土）朝、佐久平駅に集
合。宿のバスで車坂峠へ。天気申
し分なく、翌日の天候悪化が予想
されるため、リーダーの判断で急
遽予定を変更して、初日に標高差
430mの黒斑山を目指すことに
なる（これが大正解だった）。

宿で軽く腹ごしらえをしてから
スノーシュー装着。ストレッチの
後、インタープリターを先頭に11
時30分出発した。快晴無風、積雪
1・5m前後、気温は0度Cと結
構な陽気だ。土曜とあって人も多
く、トレースもしつかりついてい
る。車坂山までの緩やかな登りを
過ぎると尾根筋状の急登に変わる。
インタープリターによる各種植物
の違いや動物の足跡などを学習し

ながら、ほどなくシェルターのあ
る槍ヶ鞘を通過する。稜線に出て
から、やや下りの広場で、トレレ
スのない新雪の中、自由歩行を暫
し楽しむ。元に戻り、登り詰めれ
ばトミーの頭だ。デーンとどつか
い鯨のような浅間山にビックリ。
下りにかかるところで、反対方向
から来るパーティに遭遇。思わず
私は、別ルートを探そうと列から
はみ出すや、大方の叱声を頂戴し
てしまった。いつも一人で歩いて
いる癖が出たか。13時30分全員快
調で黒斑山ピークを踏む。360
度の展望。それにしてもこの浅間
山の存在感！ 記念撮影し数人が
アイゼンに替えた後、慎重に下山
に移る。すぐに右方樹林帯の中コ
ースに分け入る。後はのんびり、美
しい雪景色を愛でつつ下山する。

高峰高原ホテルで温泉に浸かつ
て、生ビールで乾杯し、まずは自
己紹介から入る。美味の夕食をは
さみ22時ごろまで、飲み、かつおし
やべりを楽しむ。一人暮らしで会
話の機会が少なく、しかも口の重
い私も久しぶりに人の輪に加わる。
皆さん全くお元気で、私のような
ボケ老人はいない。

翌日、風やあり曇天、気温マイ

北海道支部

ロシア極東登山の波及効果 — 高校生の授業「森林について 学ぶ」で講義 —

北海道支部創立50周年記念事業
ブレ海外登山として、昨年、ロシア
沿海地方で行なった自然環境観
察登山については、無事登頂を果
たすなど一定の成果を上げて帰国

支部

だより

全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。



浅間山をバックに記念撮影

ナス5度C。本日は高峯山トレックである。いきなり急斜面に取付く。登り切って平坦なカラマツの点在する尾根筋をたどれば間もなく山頂だ。高峰神社が祀られている。9時に宿を出て11時20分に帰着した。温泉とビール付ランチを楽しみ、その後佐久平駅で解散した。皆さん、特に集会委員の方々には大変お世話様でした。山も会話も大いに楽しめました。

(作美修)

し、その活動は会報「山」11月号の支部だよりで概要を報告したところである。
報告会活動としては、夏季交流会での坂上信之会員が撮影したビデオの上映や支部年次晚餐会でのスライドを使った鈴木貞信会員の報告、さらには道内山岳団体交流会で植田惇慈支部長の講演実績があるが、現在は報告書を作成中

である。

このほど2月1日、北海道札幌啓成高校で行なわれている「スーパースイエンス・ハイスクール」で北海道内8高校、21名の高校生に対して、渡辺悌二副支部長がロシアでの自然環境保護についてスライドを使って講義を行なった。講義の補助として西山泰正支部長と京極紘一海外登山委員も同席、日本山岳会北海道支部の社会活動と登山活動の紹介スピーチをした。「スーパースイエンス・ハイスクール」は、自然環境を利用した森林育成や棲息動物の生態研究など先進的な理数教育に取り組んでいる高校を文部科学省が指定し、海外の森林研修への派遣なども実施され、



札幌啓成高校での講義

3月には高校生が発信する国際森林環境フォーラムが予定されている。今回は3月の国際森林環境フォーラムに向けての話題提供として、オーブラチナヤ山自然環境観察登山の経緯から得たロシア極東の自然環境保護の実態について、英語によりスライドを使つての講義と質疑応答が行なわれた。

さらに森林の絶滅、環境教育、森林の衰退を救うなど、高校生が考えたテーマで3班に分かれてブレインストーミングに移り、最後はグループ発表と提言を作成して終了したが、高校生への励ましとエールということで、まともな支部長、副支部長が行なつて閉会となった。休憩時間には高校生から登山の紹介や山岳部員への講演依頼があるなど、その効果がさつそく現れて支部活動の一端を紹介することができ、意義ある機会であった。

3月の国際森林環境フォーラムには支部としてポスター発表が求められ、C・W・ニコル氏が招聘され、パネリストとして渡辺副支部長の出演が予定されるなど、ロシア極東での自然環境観察登山が大きな効果を上げていることを実感し、今年の支部創立50周年記念

事業の「カムチャツカ半島の自然生態系観察登山」に大きな弾みがついた。
(京極紘二)

東京多摩支部

東京多摩支部5周年 山野井泰史氏迎え、記念講演会開く

東京多摩支部は2月1日、設立5周年記念晩餐会を八王子市の京王プラザホテル八王子で開催した。118人が出席し、賑やかに懇談、5年を振り返り「次の5年の飛躍」を誓った。晩餐会に先立って開いた山野井泰史講演会「世界の山々を旅して」には、420人の山登り愛好家に参加し、想像を絶する超人の果敢な話に聞き入った。

東京多摩支部は2010年2月20日に全国29番目の支部として発足した。この5年間に、全国支部懇談会、都府県分境嶺踏査、初心者・初級登山教室などを実施。山梨、埼玉支部と交流登山を行なった。主要都市にサテライトサロンを設け、120を超える集まりを持った。

設立時の会員は202人だったが、290人を超えるまでになった。記念晩餐会には、森武昭・東



創立5周年記念講演会場

京多摩支部会員に日本山岳会会長として出席いただいたほか、在日ネパール特命全権大使マダン・クマール・バツラライ夫妻、神崎忠男・日本山岳協会展長、佐藤旺・東京都山岳連盟会長、深沢健三・日本山岳会山梨支部長、大久保春美・日本山岳会埼玉支部長らをお迎えした。

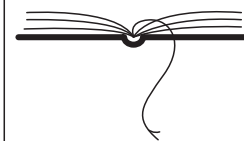
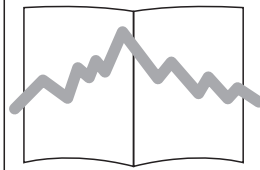
手締めは、多摩で古来行なわれてきた「七つ締め」で行なった。次の5年も頑張ろう。いよいよ。シャンシャンシャン シャンシャン

山野井泰史講演会「世界の山々を旅して」は、会場を埋め尽くす盛況ぶり。多くの人に立って聞いて

もらった。「小・中学生のころから奥多摩の岩壁を黙々と、ひとりで登っていた。40年近く経て、雲取山で初めて雪をかき分けて登った感覚、そのときの面白さを、今も変わらずに感じている」と語った。
K2、チョー・オユー、そしてギヤチンカン、グリーンランドの大きな

岩壁、ペルー・アンデスの山々と話は尽きなかった。「昨年は、ひとりで北アルプスに行った。上高地から穂高、白馬を経て日本海まで、途中、滝谷など岩を登りながら、2週間かけて歩いた。できれば一生やっていきたいと思っている」と話していただいた。(高橋重之)

図書紹介



東北の山スキー

松澤節夫編
特選ガイド



2014年11月1日発行
白山書房刊
A5判 178頁
定価 1850円+税

山書房)である。これには長年お世話になったし、頼りにもして山行を計画した。

私自身はあまりガイド本を買わない方だが、それでもこれまで3冊のガイド本を持っている。その内の1冊は誰もが持っているといっても過言ではないであろう『山スキールート図集1・2』(白

しかしながら、このバイブル的ガイド本の初版は1980年というから今から30年以上も前のものである。その後改訂を重ねているとはいえ、内容自体も古くなり(行程自体に変わりはなくともアプローチや周辺情報は更新されなければならぬ)、またルート図も手書きの概念図で、写真も含め白黒の紙面であった。もちろんその後もいくつかガイド本が世に出たが、

山スキーがBack-Country Skiと称されて再興隆の兆しを見せているにしては「よくできたガイド本」にお目にかかることはなかった。

そんな中で出てきたフルカラーの本書はまさに待望の一冊である。発行所の白山書房にも骨太さを感じるのであるが、実に5年越しの労作を出版にまでこぎつけられたことに編者の意気込みを感じる。

「東北」に限定して一冊にまとめたところが良いのではないか。これまでのガイド本は全国の山々を網羅的に紹介しようとするために結局のところ寸足らずになっていたところがあつた。本書が東北をすべて語り尽くした内容になっているとは言わないが、それでも東北について47本のコースを紹介しているのだから自ら深みを持つて

いる。

昨今、ヤマレコに代表されるウェブ・サイトでコース紹介、山行記録などたくさんさんの情報が手に入るが、一冊の本として、たとえば鳥海山について8本のコースを一覧できるのは本書の(そもそも本としての)持ち味であろう。

ルート概要・参考タイム・ガイドの内容についてはそれぞれの山

の地元の登山家、編者の仲間が担当しており信頼できることは言うまでもない。読み物としても楽しめる記述だ。カラー写真もたくさん掲載され、地形図に落とされたルート図、地図上に書き込まれたワンポイントガイドも的確で分かりやすい。加えてアドバイスの欄についてもアプローチの案内、近隣のお店、温泉の案内などが充実していて、この部分でも本書の値打ちをアップさせている。

そうだ、東北へ行こう……
そんな気にさせてくれる。

(中山茂樹)

MARTIN HOOD 訳

ONE HUNDRED MOUNTAINS OF JAPAN



2015年
University of Hawaii Press
150×228 272頁
定価 3750円+税

深田久弥『日本百名山』の完全英訳版である。出てほしかった本(以下本書)がついに生まれた。

まずINTRODUCTIONという章を設けて日本の登山世界を概説している。フランスやスイスで経

験することだが、彼らはヒマラヤ、アルプスでの日本人の活発な登山活動を知ってはいても、日本の山と登山界についてはほとんど知識を持っていない。日本の山で知っているのは富士山だけ。

その序論では、まず深田久弥の大聖寺から茅ヶ岳までの生涯を山と文学を軸にしてたどり、それと関連して万葉集から江戸期の日本の旅の文芸と伝統、明治期に始まる近代登山の発展、第2次大戦前後から戦後の成長を説明する。

Tani BunchoやSuzuki Bokushi、Tachibana Nankeiなどを紹介、アーネスト・サトウ、ガウランド、ウエストンの業績、小島鳥水・岡野金次郎の槍ヶ岳登山とウエストンとの結び付き、さらにはShiga Shigetakaを一種のアジテーターと見て『日本風景論』の大きな影響が説明されている。日本の近代登山は、ヨーロッパと違って科学ではなく文芸を仲立ちとして生まれたとして、それらが『日本百名山』にどのような影を落としているかわかる内容になっている。また日本山岳会の創設、武田久吉、木暮理太郎ほかを独立項目で紹介する。鳥水たちの槍ヶ岳探検の動機

は信仰や測量ではなく、いわばBecause it is there. だったとか、木暮理太郎は東京から見える一番遠い山は苗場山と認めたとか、1935年夏に霧ヶ峰で深田・小林秀雄などが参加した山の会にふれるなど、目配りがよくきいて、読み物としても楽しめる。

ところで、書名に「名山」表記がないのだが、本書冒頭でその理由が説明されている。当会会員で先年亡くなった宮下啓三さん(慶應義塾大学独文科学名誉教授。本書でその著作が紹介されている)と話したことを思い出す。名物・名産ならば英語はspecialty、名作はmasterpieceだけど、名山はなんていうのか。記憶する宮下教授の答は、ドイツ語にはそれに該当する言葉はない、であった。それは欧米語に共通のことで、名山という概念とそれを表す言葉がないというのである。一方、深田百名山では、名山イコールfamousとは言えないので、本書訳者はfamousとかnotableなどという言葉を使わずに名山をほのめかす方法をとったというこのように、本文中では、書名はローマ字表記Nihon Hyakumeizanであらう。

人名事典がついている。労作である。『日本百名山』に出てくる人物をたぶんすべて紹介している。En-no-ozunu、Higuchi Ichiyō、Matsura Takeshirō などおおよそ百人あまり。その人物が本書のどの項目にあるかがわかるように配慮されている。個人名が姓・名の順で表記されているのは人名事典では当然だが、本文中もそうなのには拍手。しかし、表題に KYŪYA FUKADA とあるのはなぜなのか。本文中では姓・名になっているのに。それに人名・山名の読みや参考文献に？ と思うものがあるのは残念。それにしても、この序論と人名事典は日本語版がほしくなる。本書は、日本の山から生まれた比類ない文学作品『日本百名山』と、それを通して日本の山とその背景(文化・歴史・伝統)を世界に紹介する格好の内容と言える。

これだけの知識がきちんと頭に入っている日本人がどれだけいるか。今後は、本書で知識を得て日本の山を熟知した諸国の山好きがふえてくるだろう。

訳者 Martin Flood はイギリス人。百名山の三分の一を登っているといい、雪の剣岳を登る写真などが

収録されている。朝日新聞 2015 年 1 月 7 日夕刊に本書誕生の経緯と山田晴美夫人との共同作業ぶりが紹介されていた。表紙ほか一部の写真を提供している Peter Skov (カナダ人) は、『岳人』2009 年 11 月号、同 2011 年 9 月号に登場している。並製本の表紙デザインは斬新。上製本(ハードカバー)もある。(大森久雄)

キャラバン創業六十周年記念 社史



2014年6月
キャラバン
A4判 64頁
非売品

日本のアウトドア用品メーカーの草分け「キャラバン」が昨年、創業 60 周年を迎えた。本書はそれを記念し、同社が編集・制作した社史である。1954 年、マナスル遠征隊のために開発したシューズがきっかけとなり、登山家の重鎮たちが株主となって「キャラバン」の前身「山晴社」はスタートした。「カトマンズからベースキャンプまで 20 日ほどのキャラバンが必要だ。

隊員やシェルパが履く靴を作ってくれないか」横有恒は大学の後輩でもあった、後の同社創業者となる佐藤久一郎を訪ねて頼んだ。久一郎は器用になんでも自分で作ったからだ。久一郎は軽登山靴の開発を開始、当時お茶の水にあった日本山岳会の図書室に足を運び、隊員たちの足型をとった。

そして 1954 年、マナスルに出発した隊員が現地から連絡してきた「この度の布製の靴は快適です。皆、キャラバンと愛称し喜んでいきます。日本の登山界のために市販すべき」との一言がきっかけとなって、キャラバンシューズは誕生・商品化され、「山晴社」が創業された。その後のマナスル登頂の成功、登山の大衆化の波に乗り、キャラバンシューズは軽登山靴の代名詞ともなり、1971 年には社名も「キャラバン」に改名された。

全く個人的な話ではあるが、私が初めて履いた軽登山靴は、父が履かなくなったお下がりのキャラバンシューズで、それまで運動靴で歩いていたのが、ちよつと「登山家」に近づいたような気分になったのを覚えている。

久一郎はその後、社員として入

図書受入報告(2015年2月)

編著者	書名	ページ/サイズ	発行元	刊行年	寄贈/購入別
南極OB会 編集委員会 (編)	南極観測船「宗谷」航海記 : 航海・機関・輸送の実録	275p/21cm	成山堂書店	2014	出版社寄贈
中村 誠	山の文芸誌「アルプ」と串田孫一	318p/20cm	青弓社	2014	出版社寄贈
Schwarzenbach, Annemarie	Lorenz Saladin : Ein Leben für die Berge	272p/20cm	Lenos	2007	購入
Schwarzenbach, Annemarie	Lorenz Saladin : Ein Leben für die Berge (Lenos Pocket No.159)	271p/19cm	Lenos	2013	購入

年会費預金口座振替の お知らせ

日本山岳会では、平成27年度から年会費の預金口座振替を実施することとしており、すでにお申込みいただいた方々の平成27年度の年会費は、本年4月27日にご指定の預金口座から引落しさせていただきますので、お知らせいたしますとともに、預金口座残高のご確認をお願いいたします。

なお、平成28年度以降、新たに年会費口座振替をご希望の方は、本部事務局 (FAX 03-3261-4441、e-mail jac-room@jac.or.jp) までご連絡ください。

**平成26年度第10回(2月度)理事会
議事録**
日時 平成27年2月12日(木)19時～
21時15分
場所 日本山岳会集会室

【出席者】 森会長、節田・黒川・古野各副会長、高原・吉川・佐藤各常務理事、勝山・山田・野口・大槻・落合・川瀬・山賀・直江各理事、吉



社した小西政継や深い付き合いのあった植村直己など、新しい個性と山行をともし、自然の楽しみ方を模索した。1984年に永眠したが、同年、植村直己もマッキンリーで消息を絶っている。
本書は、同社の社史ということ

で、開発・発表された製品などがカラーで掲載されており、懐かしく読むことができるが、それだけでなく、冒頭に述べた当会との関係などについても詳細に、資料写真なども使い書かれており、楽しく読むことができた。(木根康行)

永監事

【欠席者】 浜崎監事

議事に先立ち、八ヶ岳で亡くなられた学生部・吉田周平委員長らに黙祷を捧げた。

【審議事項】

1・平成26年度(後期)海外登山助成金審査について

別添資料に示す海外登山助成審査委員会からの報告を受け、審議の上「神奈川大学タサルツエ峰遠征登山隊2015」に対し10万円助成する。(賛成14名、反対なし、棄権落合理事1名で承認)

2・「C-2理事会運営規程」の改正及び「C-27理事職務権限規程」の制定について

公益社団法人への移行時に定められた「理事会運営規程」に、一般社団法人法で求められている理事及び業務執行理事の権限等に関し、不備があったため、その一部を改正、同時に「理事職務権限規程」を制定することについて、別添資料により審議した。(賛成15名、反対なしで承認)

3・「C-25遭難対策規程」の改正について

「遭難対策規程」の内容の一部を

「遭難対策運用要領」に移行し、規程全体を分かりやすく整理することについて、別添資料により審議した。（賛成15名、反対なしで承認）

4・規程類の管理責任者の改正について

新たに制定された規程類の管理責任者を定めるとともに、既存の規程で実態と合っていない部分の管理責任者を変更することについて、別添資料により審議した。（賛成15名、反対なしで承認）

5・入会希望者承認について

18名の入会（内1名は復活）について別添資料により審議した。（賛成15名、反対なしで承認）

【協議事項】

1・平成27年度事業計画書・予算書骨子案について（高原・吉川）

別添資料に基づき、総務担当理事及び財務担当理事から説明を受け協議を行ない、次回理事会で審議することとなった。

2・110周年記念事業予算と海外登山基金の取崩しについて（黒川・吉川）

標記について、別添資料に基づき、110周年記念事業担当理事

及び財務担当理事から説明を受け協議を行ない、次回理事会で審議することとなった。

3・次期人事について（森）
標記について協議した。

【報告事項】

1・110周年記念事業実行委員会から、別添資料により110周年記念事業予算及び各プロジェクトの進行状況等について報告があった。（黒川）

2・会員増強・財政基盤検討PTから、別添資料により、準会員（仮称）制度、会員サービスのあり方等について検討しているとの報告があった。（黒川）

3・日本山岳会の財政問題について、別添資料により、会費収入の減少により厳しい決算が続いているため、会員増加策、会員制度について早急に結論を出す必要があるとの報告があった。（吉川）

4・会員データ管理システムの進行状況について、新年度から運用開始を予定していたが、諸般の事情で、2ヶ月くらい遅れるとの報告があった。（高原・山田）

5・全国「山の日」フォーラムが、3月28日（土）・29日（日）に東京・丸の内

の東京国際フォーラム会場で開催されること、および森会長が実行委員に就任したことについて報告があった。（森・山賀）

6・株ネイチュアエンタープライズから『岳人』3月号に、当会所有のウェストンの写真を掲載したいとの許可願いがあり承認した。

（節田）

7・平成27年度広島支部総会、講演への出席依頼があり、節田副会長が出席することとした。（高原）

8・平成26年度秩父宮記念山岳賞の授賞式の模様が「昭和」（昭和聖徳記念財団発行誌）に掲載された。（黒川）

9・本会会員3名が、1月16日に山スキーで北アルプスに入山し、消息不明となっていることについて報告があった。（高原）

10・学習院大学山岳部パーティが、八ヶ岳・阿弥陀岳で遭難したことについて報告があった。（古野）

【連絡事項】

1・環境省から国立公園内トレイルランの取り扱い説明会の案内があった。

2・日本山岳遺産基金から第5回日本山岳遺産サミットへの出席依

頼があった。
3・植村冒険館からメモリアル展
 「山頂に残された旗」の開催案内があった。

【今後の予定】

- 1・自然保護委員会主催講演会
「平成26年度に起きた我が国の火山噴火に学ぶ」(東京工大講師・寺田暁彦氏) 3月31日(火)
- 2・第9回日本山岳会森づくり連絡協議会 4月18日(土)～19日(日)
- 3・第3回小島烏水祭・第31回全国支部懇談会(四国支部) 4月11日(土)～12日(日)
- 4・平成27年度第1回評議員懇談会 5月12日(火)16時～

ルーム日誌 2月

- 2日 総務委員会
- 3日 図書委員会 スケッチクラブ
- 4日 常務理事会 集会委員会
- 5日 110周年記念事業実行PT 会報編集委員会 パックカントリークラブ
- 6日 高尾の森づくりの会
- 7日 SUN燦会
- 9日 110周年記念事業実行PT スキークラブ 山想俱

楽部

- 10日 山岳研究所運営委員会
- 12日 理事会 休山会 フォトビデオクラブ
- 13日 「山の日」事業委員会 山岳地理クラブ スケッチクラブ
- 16日 総務委員会 資料映像委員会
- 17日 緑爽会 00会 スキークラブ
- 18日 三水会 青年部 つくも会
- 19日 資料映像委員会 科学委員会
- 20日 フォトビデオクラブ YOUTH CLUB 九五会
- 21日 山の自然学研究会
- 23日 自然保護委員会 YOUTH CLUB
- 24日 デジタルメディア委員会 集会委員会 海外委員会
- 25日 支部事業委員会 麗山会 山遊会
- 26日 学生部 公益法人運営委員会 緑爽会 二火会 01会
- 27日 総務委員会 2月来室者 504名

会員異動(2月分)

物故

城島正幸 (8174)15・1・1

大久保泰司(5031)15・2・24
仲 徳二(4853)15・2・9
退会

安田範明(10441)京都・滋賀

並木 亮(10568)

藤枝和夫(10858)

力石浩一(11222)福井

力石喜代子(11223)福井

荻野盾彦(13244)

武田輝大(13376)四国

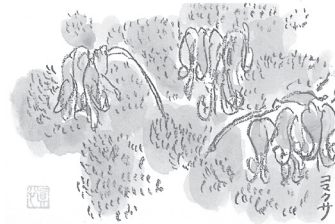
小野寺昇(13549)

山口弘子(13978)

I N F
O R M

インフォメーション

A T I
O N



鶴見 実(14268)青森
津野正康(14571)山梨
大庭俊司(14969)静岡

◆山研の管理人が4月から変わります

山研運営委員会
新しい管理人は元川里美さんです。一昨年までは上高地ビクターセンターに勤務しておりましたが、上高地の自然とそこで出会った人々が忘れられず、1年振りにカムバック。山研で働いてもらうことになりましたので、よろしくお願いたします。

山研は、本年は4月27日(月)より

宿泊できます。予約の連絡は4月

27日(月)までは本部事務局へ、それ

以降は直接山研へ申込んで下さい。

TEL 0263-9512533

FAX 0263-9512635

◆高尾の森づくりの会

春季イベント参加者募集
「高尾の森づくりの会」が行なう

恒例の一般公募イベントです。会員の皆様のご参加をお待ちします。
第15回「高尾の森」植樹祭のご案内
開催日 4月12日(日)

集合時間 9時10分

集合場所 小下沢ベース(八王子市裏高尾町小下沢国有林高尾

の森小下沢ベース)

持ち物 ハイキングの服装とお弁当、作業用手袋、マイカップ(豚

汁用)

参加費 一般500円

募集人員 200人

締切り 3月20日(定員になり次第締切りしますのでお早めに！)

申込み先 龍久仁人

ryu-kun@cablenet.ne.jp

FAX 048-25412852

第14回三宅島緑化再生プロジェクト

期日 5月22日(金)〜24日(日)〈5月

21日(木)22時 東海汽船乗船〉

作業場所 三宅島阿古、坪田、神

着地区

作業内容 被災地の植樹、園地整備、下刈作業

参加費 2万7000円(往復の船賃、宿泊代、島内バス代を含む)

締切り 4月15日

申込み先 渡辺美夫

✉ watanabe-y@c3-net.ne.jp
TEL/FAX 045-893-1952**第9回気仙沼大島震災復興プロジェクト**

期日 6月19日(金)～6月22日(月)

〈出入り自由、作業なしでも歓迎〉

作業場所 気仙沼大島

作業内容 被災マツ林の伐倒、間伐、遊歩道整備

参加費用 交通費自己負担 宿泊

費は、1泊当たり6000円、

締切り 5月20日

申込み先 小木曾裕子

✉ yuko.ogiso@konicaminolta.com

TEL/FAX 042-342-4637

(日比野宛)

第5回 ラオス展示林造成プロジェクト植樹ツアー

期日 7月4日(土)～9日(木)

作業場所 ラオス国ビエンチャン

県バンビエン地区

作業内容 郷土樹種1000本を

植樹(ラオスの村人、学生など1

00人と共同で植樹祭を行なう)

集合 7月4日夕刻までに、ビエ

ンチャンのセンタワンリバーサイ

ドホテル

解散 8日夕刻、ビエンチャン空

港発、ハノイ乗継ぎ9日早朝、

日本着(オプシヨン…希望者で

古都プアンパバーン観光を企

画)

募集人数 30名

費用概算 10万円(航空費、滞在

費、食事代含む)

締切り 5月20日

申込み先 笹野典子

✉ sasano-hoshi@nifty.com

TEL/FAX 090-4453-2670

◆残雪の男鹿岳、七ヶ岳に登る

集会委員会

個人では行きづらい日本三百名

山の男鹿岳と七ヶ岳に貸切バスを

利用して登ります。

日程 5月9日(土)～10日(日)

集合 9日7時20分新宿駅南口

行程 会津高杖スキー場～七ヶ岳

往復(湯の花温泉泊) 男鹿峠～

男鹿岳往復

費用 2万5000円(貸切バス、

宿泊代、保険料など)

募集人数 12名

申込み 4月15日(水)までに瀬沼信

一へ。参加者に詳細案内いたし

ます。

TEL 090-7271-3524

✉ syukai@jac.or.jp

◆2015年度登山リーダーのための救急救助講習 集会委員会

登山リーダーが救急救助に関し

習得しておくべき知識、スキル及

び習得方法等について実技中心に

学びます。各種グループで登山リ

ーダーを担う方及びご関心のある

方を対象とします。

日時 6月28日(日)9時30分～17時

場所 東京体育館(JR千駄ヶ谷

駅前)

講師 恵秀彦会員(遭難対策委員

会)

定員 20名

参加費 5000円

申込先 集会委員会 高橋 努

TEL 090-2906-4356

✉ syukai@jac.or.jp

*参加者に詳細を案内します。

お詫びと訂正

『山』2月(837)号23頁、「井上

靖文学館」のインフォメーション

記事、講師・芳賀孝郎氏(当会会

員)のお名前を「羽賀」と誤記いた

しました。多大なるご迷惑をお掛

けしたことを慎んでお詫びし、訂

正させていただきます。(編集部)

◆編集後記◆

●東京農工大学のムスタングアタ、

法政大学のアマダブラム、花谷・

鈴木ペアのテンギ・ラギ・タウは、

海外登山助成金を受けたものだ。

結果はそれぞれ。登頂がなくとも、

気持ちを切り替える、次への可能

性を留保する、つまり無事に帰る

ことが最優先だ。というのは実は、

私も同時期に天候などの理由によ

り目的地にたどり着けなかったと

ころ、ある人から届いた言葉だ。

●この冬、当会メンバーにも悲し

く辛く悔しい事故が続いた。無事

の帰還がなければ、それは失敗だ。

一方で登山には生命に関わるリス

クが内在し、決してゼロにできな

いの事実である。事故の検証が行

われ、次なる登山がスタートで

きることを強く願いたい。(柏澄子)

日本山岳会会報 山 838号

2015年(平成27年)3月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 森 武昭
編集人 柏 澄子
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社